

## 日本の若者映画における感情表現の特徴 —感情語と表情に着目して—

百瀬 まゆ

日本において、映画鑑賞を楽しむオーディエンスが多いということが統計的に示されている。総務省が実施した調査の報告「令和3年社会生活基本調査：生活時間及び生活行動に関する結果」、「平成28年社会生活基本調査：生活行動に関する結果」によると、映画鑑賞は最も選択される趣味・娯楽であり、なかでも10代、20代の行動率が最も高いことが明らかとなっている。映画鑑賞が若者の間で顕著である傾向は作品自体からも示唆され、主要登場人物が若者である日本映画は国内外で授賞されるなど、一定の評価を受けている。

こうした状況の中、近年注目を浴びるポジティブメディア心理学やバレット(2019)の研究により、映画などのメディアが個人にウェルビーイングをもたらし、情操を養う上で効果があることが示唆されている。また、バレットは構成主義的情動理論に基づいて、感情のあり方は人類共通ではなく社会文化によって異なると指摘しており、現代における日本の若者映画の感情表現にも特徴があると考えられる。以上から本研究では、現代日本において若者が親しむ映画について、どのような感情が描かれているのか、その特徴を明らかにすることを目的としている。

本研究では若者(10代から20代で、中学生、高校生、大学生である者)が主要人物として描かれた日本の実写映画作品を「若者映画」と称し、調査分析を行った。また比較対象として、大人(23歳以上で、社会人である者)が主要人物として描かれた作品を「大人映画」と称し、同じく分析を行った。具体的には以下の3つの調査分析を行った。(1)過去10年間に公開された若者映画のジャンルの傾向の調査(一般社団法人日本映画製作者連盟が発表する「最新映連発表資料」、「過去興行収入上位作品」に掲載された作品を使用)、(2)映画自体とその原作小説に使用された感情語を、感情の種類ごとに分類して分析、(3)映画作品で描かれる表情を、感情の種類ごとに分類して分析。(2)、(3)では、(1)で使用した作品の中から基準に基づいて選択した若者映画、大人映画各5作品を調査対象とした。

調査の結果、指摘される主要なポイントは以下の3点である。(1)若者映画では、大人映画と比べて、登場人物の感情表現を相対的に豊かに描いていること、(2)若者映画では、様々な感情を言葉や表情によって明確に表現する傾向があること、(3)若者映画では、大人とは異なる若者特有の悩みや出来事、人間関係を描くことで、それらによって生じる感情が重点的に描かれる傾向があること等が指摘される。

近年、若者が感情をコントロールする力を養うために、情操教育や感情リテラシーの教育が進められており、その一環として映画鑑賞が取り入れられている。本研究では若者映画に特有の感情表現があることが明らかとなり、こうした特徴を踏まえるならば、若者の感情を養う教育をより効果的に進めることができると提案する。

(指導教員 原 淳之)